

☆和田春生さんを偲ぶ会開催される

☆民社ゆーす総会を開催

☆結党40周年記念OB総会開催

第63号 2000年3月1日

(平成7年3月17日第三種郵便物認可)

月刊

# 民社

発行 民社協会

編集発行人 真鍋 貞樹

〒105-0003 東京都港区西新橋1丁目20番9号

和田ビル4階

TEL (03) 3501-5111 毎月1回1日発行

購読料 年間 2,000円

(会員の購読料は会費の中に含む)

## 民主社会主義と今日の政治潮流

東工大名誉教授

芳賀 綏



### ■民主社会主義は「無国籍」の思想ではない

私は河合栄治郎先生の著書『自由主義の擁護』に大きな感銘を受けたことが契機で、戦後日本が再出発した直後、すでに自分の思想的・政治的立場を決めていた。河合先生は、自由主義の理念の上に社会主義的経済構造を考えられ、「自由主義的社会主義」という言い方をされた。これが後に「民主社会主義」として確立した。したがって私は、昭和35年の民社党発足を双手を挙げて歓迎した。目の前に大きな明るい展望が開けたという心持ちであった。

ところが、この明るい展望は次々と裏切られた。民社党の議席が伸びなかったからではない。その活動・運動の形態が私の期待とはまるで違ったこと、さらに民主社会主義の理念内容が、指導者はともかく一般組織メンバーに一向に浸透しなかったということがその理由だ。

民社党はそもそも国民諸階層に開かれた政党として発足したはずだった。社会党が労働組合にだけ密着したのを批判して、民社党は自ら別の道を求めた。ところが結局民社党も労働組合に支持基盤を固定させ、国民全体に支持を拡げることができなかった。革新的と思われた労働組合も、時間とともにマンネリズムに陥り、さらに組織のエゴもある。ついぞこれらを克服できなかった。民社党も、支持を受けているということだけでそれを批判・克服できなかったことは、返す返すも残念だ。

もう一つは、理念に対する勉強不足と、それに確信を持つことができなかったということだ。「自民党と社会党を足して二で割ったのが民社党」と認識され、マスコミもそのように扱った。その情報を逆輸入し、「マスコミがそう書いているからそうなのだろう」と自己否定するくらいであったと言える。

しかし民主社会主義はそんないい加減な思想や路線ではない。林健太郎教授が言われるように、「現在の文明国では最もありふれた」、国づくりの理念としてスタンダードな思想であり、国際的に確立された思想だ。その証拠に、アメリカを別として、現在ヨーロッパ諸国で政権を獲得している政党は、軒並み民社党の友党ばかりだ。

ここで重要なのは、国際的思想であっても無国籍な思想ではないということだ。民主社会主義は、主権国家の確固たる存在を前提に改革や運動を進めてきた。ブレア英国首相は「愛国心を損なわず、愛国心を譲らず、国際協力をするのが民主社会主義だ」と言っている。民主社会主義は、国家を否定して出発した運動ではない。むしろ国家の運営、国づくりの方法・理念として確立し、定着した考え方だ。日本を長い間支配してきた一国平和主義という態度とはむしろ逆で、対外的に解放された、国際協力を含んだ国家の運営、国づくりの理念なのである。

### ■社会正義と社会的公正の実現をめざす

その標準から考えると、いま日本国内で流行り言葉として言われる言葉の中に、本当に手放して賛成できないものがいくつもある。例えば「小さな政府」「規制緩和」「地方分権」などという言葉だ。たしかにそれぞれよいことであり、私も早くから主張してきた。しかしいまの日本人の「国民としての一致」あるいは「協同」が、砂漠の砂のように崩壊しているいま、地方分権を連邦制などまで進めたらどうなるか。無原則に規制を緩和してよいのか。こういう現状を目の前にすると、いかに国内のアンバランスを地ならしして整合性ある国家をつくるかが、むしろ求められる。

いま言われている「改革」は何か薄っぺらで、眉唾ものだ。私は残念ながら、未だ人間の根源からの改革の叫びに接したことがない。効率至上的で、経済的にバランスがとれ、あるいは利潤を生み出すという大方向で「改革」が叫ばれている。本当の改革とは何かということは、民主社会主義の立場のものが一番分かっているはずである。ソシアリズムの根底にあるものは、ヒューマンイズムであり、人間らしい生き方の実現だ。これぞ新時代の要請である。

民主社会主義の精神の根源は「社会正義の実現。社会的公正の実現」だ。そのために節度ある社会、節度ある国家をつくらなければならない。したがって官僚独善でない、国民が自主性を持ったプランづくりが必要だ。計画や規制という言葉をも嫌いな必要はない。その内容、程度、運用の方法如何が重要なのである。議会制民主主義を抹殺して、計画や規制を強行した共産主義とは全く違う。私は、社会的公正ということの必要性は、いささかも衰えていないと思う。これを主張することに何の遠慮も憚りもいらぬ。

### ■思想の根本は「感覚」である

本来この基本理念に基づいてグランド・デザインを描くべき立場が民主社会主義なのである。そのグランド・デザインは、当然国情や時代状況によって内容が違ってくる。西欧諸国でも国情や社会の事情によってテンポの差がある。共産主義諸国でさえそうなのだから、まして自由主義に立脚する民主社会主義は、国情や時代状況に応じて、具体的な処方箋の内容が違うのは当然だ。

私たちは先人の立派さを立派だとして素直にそれを評価し、敬服する、感服する感覚を持ちたい。何事も基本は感覚だ。感覚の上に思想があり、政策の選択があり、行動がある。私たちは感覚を鈍磨させることなく、絶えず感受性を若返らせながら、運動に取り組んでいくことが一番の根本であると思う。 1月24日 月例研究会より(要旨)